

# 「太っ肚」な贈り物

東日本建設業保証株式会社  
建設産業図書館  
江口知秀  
*Tomohide Eguchi*

**群** 馬県沼田市にある老神温泉からの帰り、沼田駅へ直行するホテルの送迎バスに無理を言っ

て、手前の沼田公園でおろしてもらった。沼田公園は沼田駅からさほど離れてはいないが、沼田市が誇る壮大な河岸段丘の上にあるので、段丘下の駅からでは公園へ戻るのに一苦労となるからだ。

沼田公園は、地元出身の実業家である久米民之助が、私財を投じて整備した寿楽園が前身となる。久米は文久元（一八六一）年に沼田藩士の子に生まれ、明治十七（一八八四）年に工部大学校を首席で卒業すると、宮内省に入省して皇居の二重橋の設計・造営に携わるが、わずか二年で野に下り、大成建設の前身である大倉喜八郎の大倉組に入社する。そして明治二十三年には、二十九歳にして久米工業事務所を設立し、主に内外の鉄道工事を手がけた。『建設人物史』の上巻には、「創業第一歩の工事は、九州鉄道の佐賀工区で、次いで請負った奥羽線では大穴をあけ、資金系統の大倉組に莫大な借財を残したが、九州鉄道で再び挽回し、以来明治中期の請負業界で赫々の盛名を壇にした」とある。さらに請負業以外にもタバコ・葉巻の製造販売や、製氷会社などを興して成功をおさめた。

芳しくなかったようだ。前掲の『建設人物史』では、「久米は官大を出た知識人で、なかなか太っ肚な人物であったが、エリート意識が強くと、常に馬車乗り廻して生活は豪奢を極めた」とトゲがある。また『日本鉄道請負業史 明治篇』では、請負業者としての実績はそつちのことで、地方使客らとの悶着や、志岐信太郎との仲たがいの顛末などに字数を割いている。志岐という人物は、後に志岐組を興して内外の鉄道工事に活躍するが、この頃は参宮鉄道会社の技手をしており、奥羽線の失敗を打開しようとする久米によって引き抜かれていた。本書によれば、久米はすこぶる「太っ肚」で、下請けの値増しや、金筋からの小遣いの無心など、「よしよし」と引き受けてしまう。これに志岐は苦言を呈し、久米を無視して所信をつらぬいたところ、「太っ肚の所ありと雖も又一面に稚氣あり」という久米の不興を買って一割に値切られた、などとあげ連ねられている。しかし、久米の「太っ肚」と郷土愛は本物だったようで、荒城となり果てた沼田城址を公園として整備し、沼田町に寄付すると打診した。工事は大正五（一九一六）年からはじまり、自ら直接指揮する意気込みで、久米はこの公園を寿楽園と呼んだ。

大正十五年には公園西部の整備が終わり、六町九反二三歩という広大な園地が沼田町に寄付され、その後も陸上競技場、野球場、プールなどが備わった大公園として拡張する予定だったが、昭和六（一九三一）年に久米が急逝して頓挫した。その後、昭和三十（一九五五）年に都市計画公園事業の決定を受けて公園整備が再開され、ゴツゴツした上州の山々と沼田の町を足下に望む沼田公園として今にある。



久米民之助の銅像

[交通]JR沼田駅から徒歩約25分 沼田公園内

※碑文の全文は日建連HPに掲載しています。  
(同公園内にある遺徳顕彰碑、壽楽園の碑文も掲載)